「ふるさと春日井学」研究フォーラム

Forum for Furusato Kasugai Studies

「ふるさと春日井」まちづくりへの応援メッセージ

『ふるさと意識なくして地域の活性化なし』

会報

NO. 89

2023. 8. 17 発行

編集責任者：河地　清

Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

第 89 回「ふるさと春日井学」研究フォーラム

・　・　・　・

ﾃｰﾏ:　『どうする「史跡・上条城」ーその歴史的意義ー』

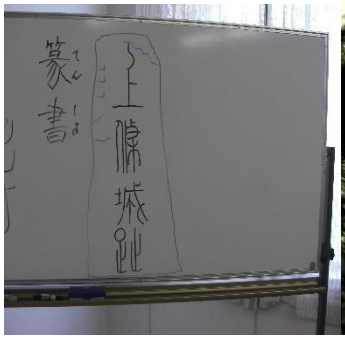
講師：河地　清　氏

「ふるさと春日井学」研究フォーラム会長

上条城は、春日井市上条町に存在しました、建保 6 年（1218 年）小坂孫九郎光善が佐渡より当地に来て城を築いたとされています。平城と言われてきていますが、典型的な中世豪族屋敷としての遺構を留めていました。現在は駐車場として宅地開発化が進み、「人呼びの丘」と言われる櫓台と土塁が僅かに往時を忍ぶ風景を残しています。

本日の講師河地　清氏は、「林　金兵衛」研究を永年続けてこられた方です。林　金兵衛は上条城で生まれた人、林家の 28 世当主でした。明治維新のとき全国的に地租改正反対運動が起きました。金兵衛が治める和爾良村を中心に東春日井郡全域に反対運動は広がりを見せました。各地で流血、逮捕、裁判、死刑判決が巻き起こる中にあって、金兵衛は、東京の地租改正局へ何度も歎願を繰り返しました。上条城は、そうした歴史的な出来事の舞台になったことでよく知られています。今回は、上条城と、林家が、小牧長久手の戦い（1584 年）の時に果たした役割を中心にその歴史を見ることにしました。

講演する河地　清氏



母屋焼失後の上条城全景（昭和 55 年頃）

《講演要旨》

はじめに－隔靴掻痒の林家研究－

現在の春日井市上条町に、『上条城』という「城」が存在しました。建保 6 年（1218 年）小坂孫九郎光善によって築城されたと伝えられています。その経緯については、津田應助編『贈従五位林金兵衛翁』（大正 14 年 11 月 10 日　贈従五位林金兵衛翁顕彰会発行）の研究に依拠しています。林家及び林家の歴史についてもこの著作物を指針として研究され、分析されてきています。私の研究（『林　金兵衛と福澤諭吉』）も同様です。書籍の中に登場する人物については、その人物の研究書籍、文献資料を通して金兵衛との関係を検討することが出来ます。金兵衛と福澤諭吉との関係は、正にその典型的な事例であす。福澤諭吉についての文献、書籍、書簡資料は膨大なものがあるので、福澤側から金兵衛の動静を読み取ることができるからです。金兵衛研究では今、一つ確たる断言の出来ない確証のない項目が多すぎることです。それは、津田應助が、『贈従五位林金兵衛翁』を編集する際に扱った、厖大な一次史料としての文献、史料の所在が、確認できないことです。市立小牧図書館、像山文庫、春日井市文化財課等を訪ねましたが見つかりません。金兵衛の嫡養子林小参が晩年過ごした林家蔵屋敷に収蔵されているかもしれません。（お蔵の調査はなされてはいません。）歴史研究は、後世の人が同じ史料を使って研究、分析、叙述することが出来なければなりませんし、そうすることによって新しい発見があり、研究の進歩があるからです。それができないということは、研究する者にとっては、隔靴掻痒の感を拭えません。例えば、林家の出自についてもしかり、家祖である今井四郎兼平が粟津原で討ち死にした後従者達は何処へ落ち延びたのか、上条城を築城した小坂孫九郎光善は本当に佐渡からこの地に来たのか、確証になるものは何もありません。金兵衛が幼少の頃富田水主なる水戸浪士から国学、入木道、大日本史などを学習したとなっている。富田水主についてつまびらかにする確証は今のところ何もありません。等々不明な点が多いということです。従って現在の時点では、「津田應助」の研究に依拠するしか他に路はありません。

上条城趾の石碑発見！

上条城がこの地に存在したとの証は、前掲書『贈従五位林金兵衛翁』2 頁に記載されています。『上條城趾存舊碑』（明治 34 年 6 月建碑）枢密院副議長正二位勲一等伯爵　東久世通禧題額並撰文、記述によれば、「上條城趾は、後年天正の役、豊臣秀吉の将池田勝入、森武蔵等巨萬の兵を率い三州中入りの途次、篠木柏井荘地方に向城を構へんと欲し、此舊趾を修理し以て據る所にして、濠塁の遺跡を存せり、其の存舊の碑文に曰く」とあります。ここに、『上條城趾存舊碑』があったことを示しています。そして、もう一つは、『上條城趾』碑（写真）です。

今回発見された『上條城趾』碑は、篆書の文字、ノミの入り具合、位置などから見て

ほぼまちがいものであると判断できました。

88 回「ふるさと春日井学」研究フォーラム「ふるさと春日井の自然と「蝶」について－春日井の蝶の自然とギフチョウー」について、尾崎尚志氏に発表をしていただきました。そのおり、城郭についても研究をされている、氏より、「上条城趾の石碑を見ました」と情報をもたらしていただきました。「蝶」の研究で岐阜県揖斐郡大野町を採集捕捉中に農家の庭先に置いてあるところに遭遇したというものでした。

岐阜県揖斐郡大野町にある「上条城趾」碑

昭和 52 年（1977）5 月 20 日母屋焼失、その後林家の資産整理が行われた際、「多くの歴史的遺物、石造物、石碑歴史的巻物、書軸、古文書類等々多くの品物が、古物商、好事家等に渡って行った」と、林家傍系の方が語っておられました。（この時春日井市文化財課はどうされていたのだろうか？打つ手はなかったのだろうか？疑問が残ります。）

石碑の横に立つ筆者（5/30 撮影）

現在は、岐阜市内古物商を営まれている松永義和氏の所有物になっています。後日電話で取材してお尋ねしたところ、「40 年以上も前の古い話でそのようなことがあったと記憶しているが、詳細については、わからないとのこと」でした。

「上条城」の歴史と地域に果たした歴史的意義を考えれば、市民全体の大切な歴史遺産であり、その証を後世に伝えて行くべきものであると強く感じました。

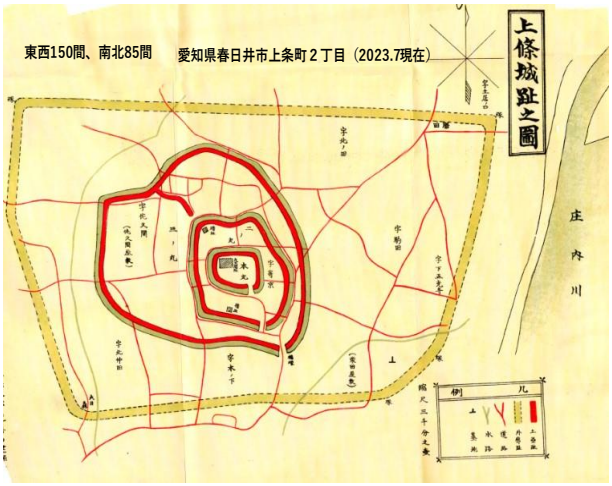
上條城跡風景人呼びの丘

土塁跡　2023.7.14(令和5)現在

上条城をめぐる歴史的出来事と歴史的役割

ー小牧長久手の戦いと「上条城」の果たした役割ー

天正 12 年（1584 年）3 月 13 日織田家家臣であった池田恒興（勝入）が秀吉側に寝返ったことを契機に犬山城を占拠したことから天下統一への勢力が二分されて行くこととなりました。小牧山城に家康軍が陣を張ることで膠着状態のまま戦局は推移していました。



上条城見取り図

秀吉軍の編成は、第一隊・池田恒興　兵 5,000 人　第二隊・森長可　兵 3,000 人　第三隊・堀秀政 兵 3,000 人　第四隊・羽柴秀次　兵 9,000 人でした。3 月 15 日、同日夜半出陣した松平家忠、酒井忠次ら 5,000 人の兵の奇襲を受け森長可軍は、敗退しま 3 月 18 日敵襲の心配がなくなった家康は、小牧山城を占拠します。一方秀吉軍は 3 月 21 日兵 30,000 人を率いて大阪城を出発、3 月 25 日岐阜に進み、3 月 27 日犬山城に着陣します。両軍とも砦の修築や土塁の構築を行ったため、双方共に手が出せなくなり挑発や小競り合いが続くものの戦況は膠着状態に陥っていました。

風雲急を告げる状況の中上条城主は**林家十四世林重登善右衛門**でした。上条城は、東西 150 間（約 270m）南北 85 間（約 153m）の平城です。重登は、上条城の三重の堀に水を張り、堅固な土塁を修築して池田恒興等の 20,000 人の兵を宿営させる準備をしました。近隣の吉田城（現在の下条町）大留城（気噴町）大光寺、泰岳寺、和爾良神社等に分散して宿営したと思われます。

吉田城跡石碑（下条町）大留城跡石碑（大留町）

上条城へは、池田隊と、羽柴秀次隊が宿営したものと思われます。羽柴秀次は、秀吉の姉の子で甥にあたる人物です。記録によれば、3 月 15 日の「羽黒の戦い」での敗退の汚名を雪ぐこと

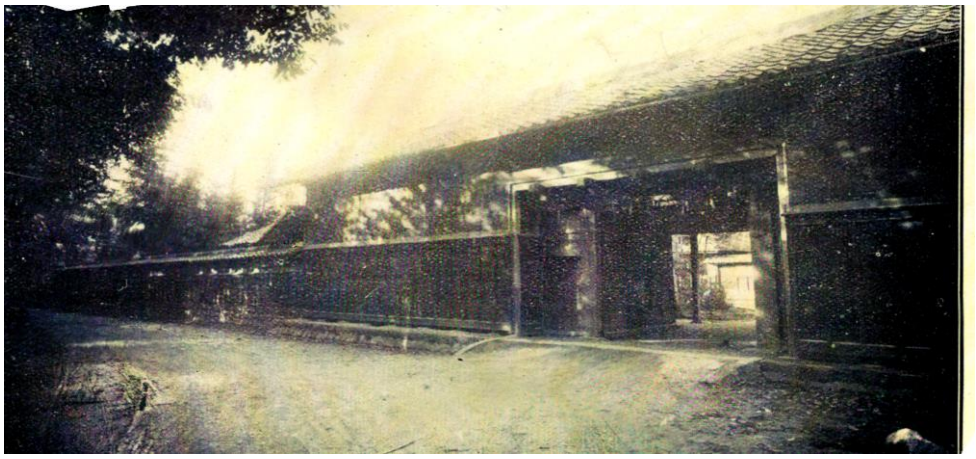
三の堀あたりにあった
上条城橋石碑

と、秀次に戦功を上げさせたいとの思いから、恒興等が秀吉に、家康の留守中に岡崎城を攻め落とすという「三河中入り作戦」を進言し、秀吉は、許可を出したと言われています。

4月7日、8日秀吉軍は上条城を中心に宿営し現在の尾張旭市、長久手市、日進市方面へ進軍を開始します。しかし、秀次軍は、9日午前4時35分頃後方から水野忠重・丹羽氏次、大須賀康高勢、側面から榊原康政勢に襲撃され壊滅します。秀次自身も馬を失い、供回りの馬で逃げ伸びるという惨敗を喫します。堀秀政軍も形成不利と見て退却します。（「白山林の戦い」）9日午前10時頃長久手において両軍が激突します。富士ヶ根に陣を構えた右翼に家康自身3,300人左翼に井伊直正勢3,000人、織田信雄勢3,000人一方池田恒興・森長可勢は、右翼に恒興の嫡男池田元助、次男輝正勢4,000人左翼に森勢3,000人後方に恒興勢2,000人の布陣でした。森長可は狙撃され討ち死にすることにより森、池田勢が総崩れ、池田恒興も体制の立て直しをしようとしたが永井直勝の槍を受けて討ち死にします。合戦は、徳川軍の勝利に終わりました。秀吉は織田信雄と突如政治的和睦を結び戦いは終結してゆくこととなりました。打討秀吉を目指した家康は大義名分を失い秀吉の天下統一の流れに取り込まれて行かざるを得なくなりました。

戦後、秀吉軍に味方した上条城は、近隣の大光寺の焼き討ちがあったり、篠木・柏井の農民の反発に抗しなければなりませんでした。元々、この地域全域は織田氏の支配下にあった所であり、秀吉側への恭順的姿勢は、何故だろうという疑問は残ります。重登の葛藤が想像されます。戦国の世を生き抜くことの過酷さを考えさせる歴史的一頁ではないでしょうか。

秀吉は、後日上条城城主重登に宿営の礼に短冊一葉と黄金若干を重登に下賜します。それに対して食膳を供して秀吉をもてなしたと言われています。その折りに使用した井戸を「太閤の井」と称して城内に存していたと伝えられています。さらに、地域57ヶ村の総庄屋にも任命されています。



秀吉軍が宿営した上條城本丸跡（林家正門）

（記録・編集：河地　清）

OPINION　西形　久司氏（東海高校教諭）から「ふるさと学」についての論説を寄稿していただきました。2回に分けて掲載いたします。

異星人と「ふるさと学」①

「愛知県の出身ならドラゴンズ・ファンだろ」

私は、この手の決めつけが苦手である。二重の意味で。まず、私は愛知県の生まれではない。こうして異郷の者を排除する狭量さがひとつ目。そしてふたつ目が、仮に愛知県出身だとして、地元球団を応援しない者を異端視する、その「まなざし」である。私が生まれ育った金沢では、テレビの野球中継はＮＨＫもＭＲＯ（北陸放送）も巨人対〇〇と決まっていたから、幼少期には巨人以外の球団を知らなかった。それ以上に、野球にはまるで関心がなかった。ちょうど1968年のメキシコ・オリンピックで、伝説のストライカー釜本邦茂選手の活躍により日本が銅メダルをとったのと、当時講読していた『子供の科学』(誠文堂新光社)の懸賞で皮革製の豪華サッカーボールが当たったのとで、ひまさえあれば友だちとサッカーボールを蹴りまわしていた。ただし友だちと蹴るときはゴム製のボールで、皮革製の方は枕元に置いて寝た。さすがに枕にはしなかったが。

小学校５年の秋に父の転勤で名古屋に転住したので、６年の修学旅行のときは名古屋の小学生だった。男子は帽子着用のことというきまりだったので、母が買って来てくれたＧＹという球団イニシャル入り野球帽をかぶっていったら、男子のほぼ全員がＣＤの青い帽子だったので、周りから異星人を見るような眼で見られた。私は宇宙のどこかで、ひとりポツンと迷子になっていた。名古屋の小学生だからといって、野球好きでなくても、ドラゴンズ・ファンでなくてもいいじゃない？人それぞれ好みもまちまちなのだから、多様であって「ええじゃないか」などと、子ども心にもなんとなく思っていた。それでみんなと同じ公立中学ではなく、規格外の男子ばかりを集める私立中学に入った。そこは先生も含めて個性派集団だったので、他愛もなく私はその色に染まった。「郷に入りては郷に従え」、だもの。

郷？ そう言えば、私にとっての郷、つまりふるさとは何処だろう？ 私は結婚して岩倉市民になったのだが、岩倉出身の妻から、岩倉の市立保育園の実践が優れているからと勧められて、そんなものかと思って岩倉に住むことになった。たしかに岩倉市の保育園にはさんざんお世話になった。保育園の存在なしには、共働き家庭の子育ては考えられなかった。それはともかく、結果的に岩倉に腰を据えて30余年。これまでの人生の過半を岩倉で過ごしていることになるが、岩倉がふるさとかというと、ちょっと違う。また、私をいまの色に染めたのは名古屋の私立学校だから名古屋がふるさとかと言うと、それも違う。金沢にいたのはたかだか10年だが、出発点は金沢だから、あなたのふるさとは？と聞かれたら、やはり金沢と答えてしまうだろうね。居住期間の長短との相関はあまりあるようには思えない。**(続)**

（編集：河地　清）

かすがい市民活動情報ｻｲﾄ：http://kasugai.genki365.net/

ふるさと春日井学　検　索